

[講演録]

「もう一つの橋」上映会＆トークイベント 中尾伸治氏講演会

中尾 伸治

【開催日】2018年11月23日（金）

【会場】国立ハンセン病資料館 映像ホール

【中尾伸治氏略歴】

1934（昭和9）年生まれ

1948（昭和23）年長島愛生園入所

現在、長島愛生園入所者自治会会長 84歳

皆さんこんにちは。ただいま紹介にあずかりました長島愛生園入所者自治会の会長をしております、中尾伸治と申します。

本来ですと、この架橋運動に携わってくださった先輩たちが、ここでお話しする予定だったんですが、それぞれ体調の都合があったり、それから急に怪我をしたりということで、突如私がここへ来ることになりました。

私も架橋運動の当時、自治会の役員として自治会におったんですけども、少し脇におったということで、詳しいところまでは話が出来ないかもしれません。しかし、その当時のことを少しは話せるだろうということで今日は参りました。そのつもりでお聞きください。

それから今日お配りされている本（国立ハンセン病資料館ブックレット4『橋を渡る 一邑久長島大橋架橋30周年記念』2018年）の中に、詳しく皆さん方が書いておられますので、また後ほど読んでいただきたいと思います。

◆長島愛生園の建物などが国の登録有形文化財に

はじめに、皆様がた、新聞あるいはテレビでご覧になったと思いますけれども、このたび国の文化審議会から、邑久光明園、長島愛生園の建造物が、有形文化財として申請が受理されることになりました。

登録有形文化財として登録されるのは、邑久光明園5件、長島愛生園5件の計10件です。

邑久光明園では、恩賜会館。貞明皇后からいただいた御下賜金で建てられた建物です。これは現在も使用しております。

それから旧裳掛小中学校第3分教場、これ教室が残ってます。この第3というのは、第1は愛生園の保育所があった分教場です。第2は愛生園の入所者の通っていた分教場です。従いまして光明園は第3ということになります。邑久光明園は、もと外島保養院という大阪にありました療養所が昭和9（1934）年に室戸台風で被害にあいまして、大変多くの方々がお亡くなりになりました。その療養所が大阪で再建される予定だったんですが、地元の方々の反対で、これが実現出来なかつたということで、結局昭和13（1938）年に長島の西の方に移ってこられたのです。この中学校が第3ということになります。

それから奉安殿、ここでは貞明皇后の御真影を飾っておられました。

それから物資運搬斜路。光明園は、急な高い山を削って頂上のあたりに療養所を作っております。そのために海岸から物資を上げなくてはいけない。それで藪池という所からトロッコで、炊事場、あるいは給食、ああいうところの品物を運搬していたという、その線路が残っているんですが、それがこのたび認められたということです。

それから、瀬溝の桟橋。これは瀬溝という今これからお話しする邑久長島大橋が出来るその狭いわずか30メートル足らずの所ですが、そこを橋が無い時は手漕ぎの船で職員が渡っておりました。その桟橋が、どうにか橋の工事の時にも壊されずに残りまして、それがこのたび指定を受けたということです。

次に愛生園ですけども、旧事務本館。これは現在、資料館（長島愛生園歴史館）として使っています。

それから次に収容所です。これは入所するときに初めて入る病棟です。この収容所という厳しい

名前が付いていますけども、ここでほかの病気を持って入らないかどうかという、一応予備の検査をするところです。そこで健康状態を見て、それなりに健康であれば一般寮、不自由な体であったら不自由者棟という具合に仕分けをしていました。

それから次に、日出の浴場ですね。愛生園というのは、非常に広い範囲ですけども、この浴場ひとつしかなかった時代がありました。で、その当時のままが現在残っているということで指定を受けました。

次に旧洗濯場です。これは病衣、それからシーツ等を洗濯します。そのほかに包帯・ガーゼ、これを再々使いました。一度使ったものをまた別の容器に集めて、それをまた入所者が選別するようなところへ持つて行って、そこでガーゼと包帯とを分ける。また絆創膏をはずして、そういうことをしてまた洗濯をして、短くなったものはまた糸で紡いで、それで再々使っていました。それらを洗っていた洗濯場が残っているということです。

それから最後に旧園長官舎です。これは光田（健輔、初代）園長が最初にここに入りました。この園長官舎は、木造ですけども現在もそのまま残っています。

この5件が愛生園では認められました。

そのほかにまだ愛生園では申請するものがたくさんあります。先ほどのテレビ番組（ドキュメンタリー作品「もうひとつの橋」山陽放送1983年制作）でもありました、邑久高等学校新良田教室、この高校だと女子寄宿舎などがまだ現在残っています。全国の療養所で1つしかなかったそういう施設も残していきたいなと思っておりますし、それから自分たち入所者が建てた恩賜記念館というのがあります。これは山を削って、それこそ材木は園内の松の木を倒して、壁には左官さんが作ったナマコ壁があります。それからタイルは愛生焼き。そういう建物です。それも指定を受けたいな、そのように思っています。これは、これから申請していく、そのように思ってます。

◆架橋運動前史

今日こうやってこの架け橋の話をするということになりましたのは、実は今年（2018年）の6月に、国立ハンセン病資料館から学芸員が来まして、架橋に関する展示会をするということで話がありました。それで架橋運動をご存知の方々に声をかけまして、いろいろな話を提供しました。ところが、ある学芸員が病気になりました、その計画は一旦中止になったわけですけれども、勤められておられる学芸員の方が説明に来られて、今回の上映会と講演会をする、そういうことになりましたので、役立たずですけれども私がここでしゃべることになりました。

架橋の問題は、ほんとに言ったら昭和32（1957）年に愛生園の園長が、光田（健輔）園長から高島（重孝）園長に交代する時に、出ていた話なのです。その高島園長が、「愛生園に行くんだったら長島に橋を架けてくれ。それを実現してくれるんなら私はこっちに来ましょう」ということで、その話を進めながら愛生園に就職してきました。

しかし、現実には非常に厳しかったようです。糸余曲折ありました。そしてまた関係省庁からは厳しい要求も出てきたようです。その要求については、光明園と愛生園で合意が出来ない部分もありました。そういうことがあって、架橋の話がその時は頓挫しました。それ以降長い間、橋の問題は消えました。それは園内の生活状態がまだまだ向上していなかったということです。

皆さん方ご承知のように、島から出ちゃいけないとか、そういうような厳しい状況がありました、また社会復帰もまだまだ難しい、そんな状態であったということ。そういうことが続いている中で、自分たちの生活もまだ、それこそ洗濯は冷たいのに外の洗面所でたらいで洗濯板を使ってゴシゴシこする。そして手に傷をつくるというような生活をしておりましたので、少しでもいい生活に向けての運動をしようじゃないかという、そういうことを優先して要求する運動も起き上がりまして、この橋の問題は少し途絶えました。

◆架橋運動が始まる

昭和の40年代になってから少しづつですけども、橋の問題が進んでくるようになってきました。

最初に昭和44（1969）年ぐらいになると思いますが、邑久光明園の方で、この狭い瀬溝に人間だけでもいいから渡りたいなと、そういう橋を作つて欲しいなという要求がきました。

先ほど言いましたように、瀬溝というのは30メートル、一番狭いところで多分22～23メートルだったと思います。狭いですけども非常に潮流が激しく、そういう所ですので事故が起きると、それこそ遙か向こうまで、沖の方まで流されるという、そんな狭い所です。したがいまして、そういうところを歩いて渡れたらなというような声が光明園の方できました。

それがきっかけで再び橋の問題が起き上がってきました。この橋を架けるのは、光明園だけでは、非常に難しいです。その当時は邑久町（現・瀬戸内市）でしたけれども、邑久町の役場にお願いに行ったり、それから岡山県にお願いに行ったりという運動がされていました。そういう中で、長島愛生園と一緒にやろうじゃないかということになっていました。

そうしまして、今度は国会議員の先生にお願いしようということになりました、岡山県出身の橋本龍太郎先生を通じて運動を始めることになりました。やはり、公共事業という問題（費用の1/3を地元自治体が負担）が起きました、県も関係してくる、町もそのように関係してくるということで、予算の面で、なかなか地元としては子孫にそういう借金を残したくないという大きな問題が起きました、そのためには進めることができなかつたのです。

それでも私たちは、人が渡る橋だけでなく、今度は病人が出た時に自動車でそのまま外部の医療施設に運べるように、やはりバスが通れるような大きな橋を架けて欲しいということで架橋運動がますます激しくなってきます。

この運動というのは、ほんとに最初のうちは盛り上がりませんでした。しかし、不自由な方々の中でも、やっぱり橋が欲しいな、自分たちは渡れ

ないかもしれないけども、そんな本土とつながる橋が出来たらいいなというようになりました。

愛生園では1度、この架橋問題でアンケートを取ってみました。そしたらその当時96%の方々が賛成してくれました。それによりまして、その運動にますます力が入つていくことになります。

その当時まだ畠で自分たちで野菜をつくりながら生活しているような状態でしたので、それから外へ行きたい、遊びに行きたいなという機運も盛り上がってきた。

それからもう1つ、民間の森丸という船が地元の虫明の港から長島に船を着けて、それから日生という町へ船で運行してくれました。これには、私たちを乗せてくれたんです。しかし、乗せてはくれましたけれども、最初のうちは夏でも冬でもその船の屋根の上です。船室にはなかなか入れてくれませんでした。その船は立派な客船ではなくて貨物船のようなもので、床にゴザを敷いて、冬だったら火鉢をたいて運行しているような船ですけれども、それでも中に入れてくれなかった。

ところがある時に、一緒に乗っていた一般客のおばさんが、「さぶいのにそんなとこ乗っとらんないわ」と言って、中へ入れてくれたのがきっかけで、その船の中に入るようになりました。そうしているうちに段々地元の人たちにもその橋の問題が広がっていきます。

しかし、いざ話を進めていくときに、やっぱり地元の人たちというのは反対しました。「自分たちの頭の上を、汚い患者が通るということは反対だ」などという。「そんなに渡れるようになるんだったら、みんな家に帰りやいいがな。病気が治つたなら帰りやいいがな」。そういう言葉も出ました。

そんな時ですけれども、どうしても橋脚を立てなきゃいけない、橋げたを渡さなきゃいけない、その建てる要求を勝ち取つてもらわなきゃいけない。そういうようなことがありますので、地元の県会議員の先生にお願いして、地元での話を進めもらつた。そこまでいくまではほんとに大変な道のりであったと、私は思つてます。

◆園田直厚生大臣の確約を勝ちとる

そういうことがあって、いよいよその橋の問題を大きく取り上げていただくということで、先ほど言いました橋本龍太郎先生がその当時厚生大臣になられたときにお願いに行きました。で、「よっしゃっ」という時に、内閣解散になってしままして、まったくその橋本先生の威力がなくなってしまうような状態ということで、次の大臣に委ねることになりました。

次は斎藤（邦吉）という方が厚生大臣になられたと思います。その時に富士見産婦人科病院事件というのが起きました（1980年）。ご存知の方はあると思いますけれども、若い婦人方の子宮を取ってしまうという、大きな間違いを起こした病院の事件がありましたけども、その事件を収拾するような意味において、長島架橋の話が持ち上がる。振替のようなことで架橋問題が進展することになりました。

富士見産婦人科病院事件のために、斎藤厚生大臣は交代されて、次に園田（直）大臣になったんですが、その園田大臣が架橋を、「人間回復の橋」として認めようということで、初めて公表されることになりました。

この時は、大臣室に我々入所者の代表を入れて、それからカメラマンも入れました。そういうことをして発表された。代替のようなことですけれども、その事件によって、架橋が実現するようになったということがあります。

それからのちは、それこそ調査費が2年ほど続きました。それから次の建設費というようになっていきます。愛生園でも光明園でも、どこに橋を渡すか色々コースを考えて発案しておったんですが、いよいよコースが決まって、現在の瀬溝から光明園に渡る橋が出来るようになりました。

私ごとですけれども、その頃私、園内で結婚しておりましたんですが、その妻が、ちょうど橋を架ける橋脚が立つ頃に、膠原病という病気になりました。わかったとたんに7年しか命がないということがわかりました。その工事を見ながら、妻は、「私は渡れないな」ということを言いました。しかしながらしてでも橋を見せてやりたいと思っ

て、その橋脚が光明園と虫明に立った時に、今がチャンスだと思って、他人のカブっていう小さな単車で、2人乗りは禁止ですけども、愛生園から光明園の瀬溝まで行って、その橋脚を見せました。これが、妻が橋を見た最後でした。これに新しい橋が乗るんだからってことで、楽しみに療養生活に入ったのです。

◆橋が架った途端に園内が明るくなった

それからこの橋はどんどん工事が進んでまいりまして、橋脚も出来まして橋自体が運ばれてくる。そうなると、島じゅう、それこそ虫明も交えてですけど、大騒ぎです。

130メートルの橋げたがクレーン船で吊り下げられて、長島の東の方からゆっくりゆっくり、湾の中を橋を架ける目的地まで渡って来る。長島の東の端に現れたのは朝6時頃で、それから橋げたが橋脚の上に乗ったのは12時頃です。その間ほんとにご飯も食べずお茶も飲まずというような感じで、元気な者はその作業が見える場所で、みんな寄ってその完成を見たのが思い出されます。

ある人は、どういう見方をしておったのか知りませんが、橋げたに乗る時に、「あと何センチか足らんぞ！」っていうようなことを、わざわざ言いに来てくれたり（笑）、大騒ぎしておりました。ちゃんと測っているので1ミリの狂いもなく乗つたんですけども。ほんとに漫才みたいなことがありました（笑）。そんな状態で橋げたが架かりました。途端になんか世の中が明るうなった、もう橋が架かっただけで園内全部が明るうなったような、そんな気持ちで生活をしました。

◆検問ゲート問題

この橋が出来てきますと、また対岸の道路も新しく造られました。すべて繋がってきた。いよいよ完成間近という時に、検問ゲートの大きな門というものが出来ました。

我々入所者は架橋運動を進めるにあたり、愛生園・光明園合同の架橋員会を作ったんですが、この検問ゲートの話は聞いてないよと言いましたの

は、愛生園でした。光明園は、いやそれは最初から作ると言うと、ということでした。

現在もまだ、この話になると口角泡を飛ばすところになるんですが（笑）、その当事者がもうほとんどおりません。光明園に残つとるかどうかぐらいのことで、愛生園側はほとんどの方が亡くなつてしましました。現実に橋が開通した時に渡れたい人ってほんとに少ないんです。架橋委員会の委員長やった人なんかは、橋が出来た時には皆、私たちの納骨堂に入つてしまつておりました。

いずれにしましても、見張り番のような検問ゲートが出来た。それに対してあくまでも反対しまして、ほとんど出来上がつてゐるようなものを壊すことになりました。現在ロータリーのような形で使用しておりますけれども、そのようになつて決着しました。

しかし、「人間回復の橋」を造るんだということと動き出したのに、なぜその監視のための検問ゲートのようなものがいるのかということです。それから、その監視のためというのは、人がおるわけじゃなくて、カメラですべて見る。光明園、あるいは愛生園の方に電波が飛んで、それでこの人は愛生園の人、この人は光明園の人、この人はいつも商用で入つてゐる人、というような仕分けをして、そういうことをされるということ。もし、全然知らん、ほかの人だったらそこで止めてしまう。そういうようなもんが出来ることになつておりましたんで、あくまでもそれは反対しようということで、結局、取り壊しになつたのです。この時も激しい運動になりましたけれども、そういう歴史もこの橋の中にはあります。

◆架橋後のさまざまな変化

それ以後、私たちのところには、この邑久長島大橋を渡つて、多くの人たちが愛生園、光明園においでになります。昨年愛生園では1万2000人以上の方々がおいでくださいました。光明園も同じくそのぐらいの人たちは来ていると思います。

私たちも、自分たちの今までのハンセン病に対する、この、偏見差別というんですか、そういうものの解消のために、色んな方面に話をしに行つ

ております。啓発活動に行っておりますが、行つたときに、やっぱり「話を聞くよりも実際に見に来てください」ということを、この頃は言っています。そういうことで、愛生園に来訪していただくほうを選んでいます。そういう話をすると人も段々少なくなつてきました。従いまして、今のうちに来ていただく。そして私たちもなるべくそういう昔のことを話せる人は、録画録音して皆さんに聞いてもらうような、そういう準備も整えております。そういう状態で現在では、この橋を利用した運動を続けているところです。

橋が出来ましてから、色々な問題が解決もしました。ひとつは家の建て替えだと、そういう工事の関係です。今までフェリーボートで渡つていていたものが、橋で来られるようになつたということです。昔はコンクリートのミキサーがなかなか愛生園には入つてきませんでした。だから工事をするといついたら、園内にコンクリートを練る塔を建てて、そこで生コンを練つて重機で運ぶという、そんな工事をしておつたんですが、今はコンクリート車も来ます。色々な材木もそのように橋を渡つてくるようになりました。それまでのフェリーボートで渡つていたときの損失といつたら凄いものであつただろうなと思っています。国が払つたお金というのは、それこそ橋が出来るほど払つたんじゃないかなと思います（笑）。

また、間違つて火災を起こした時に消防車がフェリーボートで来ます。来る間にどんどん燃えてしまつたこともあります。今はそういう間違いを起こしたときには、ほんとに嫌になるほど消防車が入つてくることもあるんです。ちょっと小さな家が燃えたことがあるんですけども、それに対して消防車が20台ほど来まして（笑）、もう愛生園の道が真っ赤になつたような、今では笑い話に出来ますけど、そんなことがありました。

この橋のおかげで、そのように自由に往来が出来るというようになつてきたといえるんじゃないかなと思っています。

今までこの橋に関わつてきてくださつた方々、それぞれが、国会の先生方にしましても、入所者にしましても、本当にたくさん亡くなられました。園田先生も、橋を見ずして亡くなられました。橋

が出来た時には光明園、愛生園の代表が、園田先生のお墓がある熊本までお参りに行って、お札を言ったという、そういうこともあります。橋本龍太郎さんの葬儀の時は、私も参加しました。このようにしてお札を語っておるところです。

◆橋が架かり、家族とのつながりが復活した

現在その橋が交流の場として非常に多く使われています。交流だけじゃなくて、今度は入所者と家族との関係というのもまた復活してきたというような人たちもおります。それから、途絶えていた兄弟から手紙が来てみたりと、そういうこともあります。

また私ごとになりますけども、橋が出来まして、開通式の時、地元の邑久高校のプラスバンド部が先頭切って橋を渡ってくれました。その後ろを100歳近い両園のおじいさんおばあさんが続いて渡ったんですけども、その映像を私の母がテレビで見ておりまして、たまたま私の顔が映ったんです。そしたら、長いこと会っておりませんでしたので、母親が初めて、「何十年ぶりかでお前の顔を見た。元気で良かったの」ということで、電話をくれました。橋のおかげで母親と面会出来たことになるんです。この母はその後早くに死んでおりますから、元気な間にその母と、テレビでですけども、面会出来たのです。

それから30年経って、今度はつい今年（2018年）の5月に、架橋30周年の記念の式典をしました。その時にその記事を見た私の姪っ子から70年ぶりの手紙が届きました。

これはほんとに私が昭和23（1948）年に愛生園に入った時、入って気分が落ち着いた時に、自分の甥っ子姪っ子に、「俺はハンセン病になった、でも文通ぐらい続けてくれるわな」、そんな手紙を出しておったわけです。しかしその時には誰も返事をくれませんでした。

しかしこの間、架橋30周年のその新聞記事を見た、三重における姪っ子から手紙が届きました。70年の長い間のお詫びと、自分の家族のことと、それから奈良や京都における自分の甥っ子姪っ子のこととを手紙に書いて寄越してくれました。その三重

からの手紙だけだったらあまり信用しなかったんですが、奈良だと京都の甥っ子姪っ子の様子を書いてくれておりましたので、これは間違いない、ほんまもんだ、と思って。ほんとに70年ぶりの返事を私から出しました。この8月にも可愛いヨットの絵をかいてまた暑中見舞いのはがきが届きました。これからまたこの姪っ子と仲良くやっていきたいな、そのように思っています。

長島架橋は人のつながりだけじゃなくて、自分たち家族のそうしたつながりもまた復活させてくれました。多くの人たちがこのようつながりを起こしてくれたと思っています。私はこの架橋というものは、ほんとにただ橋が架っただけじゃない、人だけが渡るんじゃなくて、心も繋がってくれたということです。

長島に架かる小さな邑久長島大橋と、四国に架かる瀬戸大橋とは、誕生は同じ年です（1988年）。瀬戸大橋は4月1日に誕生を迎えましたけども、邑久長島大橋はそれより後になります（5月9日）。これは国会議員の先生方の都合でどちらも出席したいということがあったようです。そのために後になったということですけども。邑久長島大橋は短い橋ですが、私は瀬戸大橋よりも大きな橋であると、そのように思っています。

これからもこの橋は、多くの人と繋がっていくと思います。

◆世界遺産の登録を目指して

冒頭で言いましたように、長島に色々残っている建物を残していく中で、この橋は大切です。

私たち長島愛生園と邑久光明園、四国にある大島青松園という3つの園は、それぞれ瀬戸内海の島の療養所です。従いまして、私たち3つの園が世界遺産に登録して、自分たちの苦しかった生活、またハンセン病に対する大きな偏見差別の歴史、人権学習が出来る島になってほしいということで、今世界遺産運動もしております。

先ほど言いました建物の保存が決まったことで、大きな足がかりが出来たんじゃないかなと思っています。これからまだまだ時間がかかりま

すけども、この運動を進めていきたいと思います。予防法廃止の時には私たちだけじゃなくて、多くの市民の皆様方の応援がありました。そのような応援が、私たちにはこれからまだ必要です。その節には非常に申し訳ないんですが、参加していただいて応援していただきたいなと、そのように思っております。

この橋というものの運動、ほんとに思い出したら色々なものが甦ってきます。初めて厚生省に行ったときに、厚生省の玄関先に座り込んで大きな横断幕を立てて、それからビラまきもしました。厚生省の前の地下鉄の出入り口の所でビラを配つたりもしました。

それから地元のビラまきの辛かったことは、ほんとに今思い出してもぞっとなります。1軒ずつ配ったんですが、やはり人と出くわした時に、そのチラシを渡した時にまともに受け取ってくれた人はおりません。たいがい目の前で破るか足で踏みつけるか、地元の虫明地区ではそんなこともあります。そのような状態の中で私たちは運動をつづけました。

しかし、その人たちの応援があってこそ橋が出来たということです。最後は私たちの願いをその人たちが聞いてくれたということで、実現出来たんだろうと思います。ほんとにこの橋1つ作るのにたくさんの国会議員の先生、県会議員の先生、市会議員の先生、色んな方にお世話になって出来たと思います。

今私たちは何の障害もなくて、今日はどこどこ行くんだといって自動車に乗って外へ出て行っています。最近では病棟に入っているなかなか外出出来ない人たち、「私は行けんわ」といっていたような不自由な人たちも、看護師さんに連れられて近くのスーパーへ買い物に行けるようになりました。たまには桜の時期には兵庫県の赤穂の方まで行って、桜の木の下でお弁当を開いたという、そんな人たちもおります。

本当に橋は大きいです。皆さん方の心も大きかったと思いますが、現在でもその橋の存在は大きいです。また若い人たちがたくさん来てくれておりますので、私たちは、その若い人たちに向けて、私たちの願いを込めて、話を伝えていけると

いいな、そういうのが現状です。

私、今回ピンチヒッターのような形で来ましたので、まともにしゃべれておらないと思いますけれども、これで私のお話を終わりたいと思います。

少し時間がありますので、何か質問ありましたらどんなことでもけっこうですので、質問をしてください。

◆質疑応答

質問者1：こんにちは、遠くからみえてくださった講師の方に、皆さんで温かい拍手を大きな拍手を送りたいと思います。ほんとにありがとうございます。わたしも結構耳が不自由になりました、話を聞き取るのがちょっと無理なところがあるんですけど、本当に一生懸命話してくださる熱意が伝わってきました。本当に苦労されて色々な思いが沢山おありだと思うんですけど、これからもお元気でお暮らしになってください。ありがとうございます。

中尾：ありがとうございます。今後とも応援よろしくお願ひいたします。(拍手)

質問者2：本日はありがとうございます。橋が出来た時に、橋が出来たらこんなところに行つてみたいとか、橋が出来たらこういうことをやってみたいというような声を聞いたことがあれば教えてください。

中尾：やはりふるさとじゃないですかね。高知の人だったと思うんですが、ほんとにそれを待ちわびていたように友達の車で何日かけて、足摺岬の方まで帰られたことを聞いてます。まず最初に行かれたのは、やはりお墓です。お墓でお父さんお母さんに会いに行かれたということを聞いています。どれだけ待ちわびていたかということです。

質問者3：今日はありがとうございました。橋が出来て療養所の方が出かけたり、色々出来るよう

になったと思うんですけど、一方でその対岸の地域の方たち、特に今のハンセン病の歴史を学ばないと知らない若い人たちっていうのは、今例えばどういう風に長島愛生園とか邑久光明園のほうに何か関わっていますでしょうか？

中尾：地元の裳掛の小学校の方々は、愛生園にはつい昨日、発表会に来てくれてます。このつながりはもう何年にもなります。また夏祭りには出演してくれるようになります。また中学校の方々は年に1回、全校生徒さん500人みんなが来ますので、1日か2日がかりで愛生園を見学して、ハンセン病の勉強をしてくれます。最近では邑久高等学校新良田教室の本校である、尾張にある邑久高等学校ですが、その高校に地域委員会というのが出来まして、そこの生徒さんがハンセン病のことで現在関わってくれています。私たちは、先ほど言いました語り部というのが段々少なくなってきたおりますので、地元のそうした小中学生高校生の人たちに、やってもらいたいなと思っています。

これは、以前に裳掛中学校の生徒さんの野崎やよいさんという方が、当時橋のことで詩を作ってくれました。今日お配りされているブックレット（『橋を渡る』）の中に載っているそうです。ご覧ください。少しだけ読みますけども「虫明と長島の間は／呼べばとどくほどの／せまい瀬戸内の流れだけだ／でも／虫明と長島の間には／もっともっと大きなへだたりがある／（略）なぜ長島に橋をかけないのだろう」以下略しますけども、そういう詩を作ってくれた人がおります。先ほど聞きましたら、この方ももう相当なお歳になっておるそうですけれども。

この隔たりというのがこの虫明との間にあって、非常にきつかった。現在は虫明の方々と少しはお酒も飲めるような状態になってきたという、そういう具合に少しですけども開けていって繋がってきてているといいますか、まあそういうような状態になってきているということです。

質問者4：本日はありがとうございます。一応今日の題名でいうと「もうひとつの橋」も架かった

ということなんですが、まだ心の壁を感じるっていうのはどんな時なんでしょうか？

中尾：あの、ほんとに申し訳ないんですけども、解放されて本当に理解を得ているかというと、まだまだそこまでいってないということです。例えばほかの病気だったら家族会があるとかそういう繋がりがあります。しかし、ハンセン病の場合、そうした肉親の繋がりがあるわけじゃない。仮に今、そういうものをつくろうとしてもなかなか出来ない。やっぱり今でも関わりたくないという感情が残っているような気がします。

怖い病気という気持ちが皆さんの中にあるのかどうか知りませんけれども、僕のように顔が曲がつったり、手が曲がつたりすることになると、やっぱり少し距離があるよう思います。やっぱり弱い者というのは隅っこへ追いやられるような、そんなような感じを受けることがあります。

少し前の話ですけども、ハンセン病回復者の方が店でコーヒーを頼んだら、醤油を薄めたものが出されたということがあります。その時、その醤油のコーヒーが入っているお茶碗を持って市役所まで走って行って、抗議したという話があるんですが、そういうことがあったりします。

それから私がある小さな本屋さんで、友達の子どもに送る本を探していたら、ある子どもが、「おっちゃん、僕こんな本探してるから探してくれ」というから一緒に探しとったら、その親が来て、子どもの手が抜けるような勢いで連れて行つたことがありました。そのようなことがたびたびきました。

ひどい時は、スーパーで買い物しとったら後ろからモップでひっつかれたことがあります。私の後をついてモップでふいてくる。でまあ、そのおばさんには「ご苦労さんです」と言ったんですけども（笑）。まあ、そういうことをされたこともあります。そんなことがまだまだちょこちょことあるのです。

それから、今社会復帰された方々が町で生活されておりますけども、病気になった時に病院になかなか行けないということがあります。どこの病院

でも診てもらつたらいいと思うんですけども、まだまだ、例えば全生園に来るとか、岡山だったら愛生園にあるいは光明園に入るとか。そういう具合にはなかなか出来ないような、そういうこともあります。もう病気が治ったんだったら少々障害があつても、ほかの病院でも診てもらつたらいいと思うんですけど、やはり元患者だったというようなことがわかることが、やっぱりそれもひとつの障害としてあります。これが消えたらいいなとも思います。

質問者4：あともう1点だけ、国は回復者がひとりもいなくなるまで、国が面倒を見ると言っています。しかしそれは現実問題として難しいと思うんですが、各療養所は今後どうしたらいいと思いますか？

中尾：私ども愛生園の入所者は今日現在156人になります。この人たちは、ほとんどもうほとんど85歳以上です。それぞれ障害があります。とても自分で生活出来るような状態じゃない。その人たちを放り出すということは出来ないということで、法律で最後まで面倒を見てくれるということになっておりますので、入所している人はそのような形で一応保護されています。しかし、社会へ旅立った人たちが最後までそのまま社会で生活して終われるかどうかというのは疑問があります。どうにも出来なくなつた時にはまた療養所に帰つてくる場合が現在もありますので、そのようになりますけども。一応そこまでは、今のところ法律で保護されましたので、決まっています。

木村学芸員：お話を尽きませんが、時間が来ました。中尾さんありがとうございます。最後に中尾さんに、温かい盛大な拍手をお送りしたいと思います。（拍手）